

シアトル・ゼネラル・ストライキと 日系人労働者（Ⅱ）

黒 川 勝 利

Ⅳ ストライキと日系人組合の対応

2月6日午前10時、6万人を越えるシアトルの労働組合員がストライキに突入した。これに加えて約4万人の組合に加入していない労働者が、一部は労働者階級の一員としての連帯感から、一部は「革命」にともなう混乱や暴力への恐怖心から、しかしながらおそらくほとんどの者は職場に向おうにも交通機関が完全にストップしているという理由から、仕事を休んだ。市民の間には、私有財産の没収が始まった、銃を持った200人のボルシェヴィキがシカゴからやってきた、市長が暗殺された、水源地が爆破された、などといった流言が飛び交い、上流階級の中にはおびえてポートランドに脱出した人々もあった。⁽¹⁾

このような事態に、シアトルの日系人社会もちろん無関心ではありえなかった。

当時シアトルで発行されていた日系新聞の一つで、造船所ストライキの段階からたびたび今回の争議についての記事を報道してきた『大北日報 The Great Northern Daily News』は、すでに1月30日、もはやシアトル労働者のゼネラル・ストライキへの突入は不可避であると判断して、これに対する日系人社会の対応を論じている。

(1) 以上, Friedheim, *op. cit.*, pp. 123-125 による。

当市ゼネラル・ストライキは大勢の決する如その実行最早や疑ひを容れざる事態となれり元来造船所の同盟罷業側の主張及時期に就ては種々異論あるも今日に至りてはその可否を論ずるは既に遅く組合側の同情ストライキは唯だ結束以何の試金石と見るべく本誌報道の記事によりその経過及成行を窺へば大罷業は今日のところ既定の問題なりと推定せらるゝ

さて、シアトル日系人社会の中でもっとも直接的にストライキに対する態度の決定を迫られたのは、言うまでもなく日系人組合の関係者であった。この時点における彼らの去就について、『大北日報』の同じ記事は次のように報じている。

▲同胞側 のユニオン加盟者は準ユニオン員としてダイオーク組合の八十名及白人組合と同一の歩調を採り進退を共にする規約の下に同胞側のみを以て組織する理髪業組合の二者あり就中ダイオーク組合は既に幹部に於て同情決議の方針を定め一兩日中総会を開らき満場一致を以て該決議案通過の方針なりといふ⁽²⁾

その後の事態はもちろんこの『大北日報』の予測のとおりに進んだ。そして日系人組合の方針にも変更はなかった。一週間後の2月5日付の『大北日報』は、ストライキ突入直前の日系人組合の動向を以下のように報じている。

▲同胞組合の同情の清き一票 既報の如く米国唯一の公認同胞組合たる同胞ダイオーク業組合は一昨夜臨時総会を開らき討議の末同情的罷業に決定したれば昨夜八時レボアールテンブルに開会のダイオーク洋服業組合の大会に同胞側より七十余名出席し執れも同情の清き一票を投じたり……

▲レストラン組合も 亦白人組合と同一歩調に出づる事となり本朝実業倶楽部に於て

(2) 以上、『大北日報』1919年1月30日付5面。

同業者会合協議の結果愈々同情加盟と決定したりといふ⁽³⁾

もちろん、このような行動に踏み切るまでには、日系人組合の幹部の間にもかなりの迷いがあったことと思われる。ストライキはシアトル市民を二つの陣営に分断しつつあった。労働者側との連帯を明確にすることが、他方では経営者や一般市民の反発を呼び起こす可能性もあった。ストライキ反対派のワシントン州議会議員の中には、「米国市民に非らざるものにして罷業を称揚し弁護するものは刑事罪人として処分せらるべし」との法案を州議会に提出した者もいたのである。⁽⁴⁾そもそも、ストライキという手段自体、アメリカ人労働者にとっては当然の権利であっても、その当時の日系人には反社会的な、過激な行動に思えたことであろう。後に、ダイウオーク組合の幹部はその決断に至るまでの事情を次のように語っている。

此度の大罷業に就ては日本人幹部の人々もなにしる初めての事であり、其の去就に就て色々と研究した結果既にアメリカン、フェデレーション、レーダーなるものが米国政府の承認を受け同業利益団体として存在しその憲章中には罷業なる事も明記されてある以上之れに加盟して白人と同様態度に出づる事が聊も米国に対して不忠の行動とはいへぬ

(3) 『大北日報』1919年2月5日付5面。なお、同日の紙面にはこの他にも、「同胞労働組合には過般来労働組合より罷業に関し種々交渉に接せしを以て態度決定に就き討議する所ありしが愈之れ亦罷業賛成と決定し従来アメリカン、フェデレーション、オブ、レイバーが同胞労働者に対し区別的待遇をなし得つゝありしもローカル、ユニオンにして多大の同情を有するもの少なからず而かも労働階級に属するものとして階級戦に参与すべきは当然の義務なり云々との通牒を白人組合に発し併せて金五十弗を罷業基金へ寄付を申出でたる一方同胞労働組員及び組合外同胞労働者に対し」て、「日本人労働組合本部」の名前で、「ゼネラルストライキ中当組員は労働を休止せられたし当組合に属せざる諸氏も其労働種類の各ユニオンの行動に準ぜられたし」という警告を發した、という記事が掲載されている。

(4) 『大北日報』1919年2月7日付5面。なお、この記事が記載されている『大北日報』の第5面欄外では「2月6日」となっているが、その他の記事の内容、および「金曜日」となっていることから、明らかに「2月7日」の間違いである。

殊に白人ユニオンの大勢が罷業賛成を決定した以上吾れ等のみが反対態度に出づる事は考慮すべき事柄であり民族発展という見地より見ましても元来日本人の真価上流白人間には了解せられて居りますものゝ下流白人間には尚幾多の誤解あり而して対日本人の紛争の因って来る所は主として誤解せる此の下級白人からの事であり而かも米国のような国柄にあつては其の勢力が政治経済上に動かすべからざるものある点より吾れ吾れの此の際に於ける一挙手一投足は極めて責任大なるものと考へまして個人利益を犠牲として罷業賛成の決定を幹部会に於てなし日本人組合総会へ附議しますと満場一致を以て幹部提案は通過致しました⁽⁵⁾

このような日系人組合の動向がストライキに参加したシアトルの労働者によって歓迎されたことは言うまでもない。本稿の冒頭にも紹介したように、シアトル労働運動の機関紙であるユニオン・レコード紙は、2月5日付の論説の一部において次のように述べている。

ストライキの興奮のさなかではあるが、しばし手を休めて日本人理髪師およびレストラン労働者の行動に注目しよう。彼らは、自分たちの組合において、ゼネラル・ストライキに参加することを決定した。ここシアトルにおけるストライキは、わが国におけるこれまでにない国際主義のデモンストレーションの機会となりつつある。

日本人はこれまで労働運動のその他の部分から参加を拒否されつづけてきて、彼ら自身の発意によってストライキに参加したのであるから、このことは一層賞賛に値する。我々は労働者の連帯のこのような証拠が将来における二つの人種の関係に影響を及ぼすことを希望する。⁽⁶⁾

(5) 『大北日報』2月13日付5面。なお、当時のシアトル日系人社会全体が、このような日系人組合の決断に、明確に支持してはいなかったとしても、少なくとも反対ではなかったであろうということが、『大北日報』の一般的な論調や、同紙7日付の以下のような記事などから窺える。「北米日本人会にはストライキ情報部を設置し理髪業、ダイオークホテル労働組合その他と連絡を取り情態の変化に従ひ各方面の情報を得て一般同胞の参考とすることに決したり情報部は現在の日会事務所にては不便少からざるを以て臨時東洋運送社内に設置しあればストライキ中に起りたる種々の出来事は同部に申出あるべく電話はエリオット二三八一なり」(『大北日報』2月7日付5面)。

さらに翌6日付のユニオン・レコード紙も、「全日本人が店を閉じる——組合も日本人実業家もどちらもストライキに参加」という見出しのもとに、以下のように報じた。

日本人労働組合の指令と指導的日本人の忠告に従って、市のすべての日本人企業は今朝10時をもって閉鎖される。

レストラン従業員組合の副委員長であるジョージ・ミツオカは昨日午後、彼の組合はストライキを支持しており、金属産業評議会への同情ストライキに参加するであろうと語った。組合の委員長であるT・ツクモも同様のことを述べている。理髪師組合のビジネス・エイジェントであるC・イトウは、彼の組合が、火曜日夜の白人理髪師組合の行動を受けて、満場一致で同様の行動をとったと語っている。日系のトーゴー・エンプロイメント・エイジェンシーの経営者であるR・S・ホソカワは昨日午後彼の事務所は今朝の10時に閉鎖されストライキの間中閉鎖されるであろうと語った。

市の二つの日系新聞はいずれもストライキが終るまで発行されないであろう。市の編集者であるS・ミヤサキによる論説でノース・アメリカン・タイムズ（『北米時事』——黒川）紙は昨日午後全日本人事業所を閉鎖するよう勧告した。多数の日本人レストラン経営者が閉鎖の意志を表明しており、残りのものもこの処置に従うであろうことは疑う余地がない。⁽⁷⁾

こうして、日系人組合の行動は、白人労働者、労働団体の日系人に対する評価を変化させる契機となったのである。そして少なくとも一部の日系人は、すでにストライキのさなかにおいて、従来とはまったく異なる白人労働者の日系人への対応を肌で感じる事ができた。2月8日付の『大北日報』は、「総監組長胴上げにさる」との見出しのもとに次のような出来事を報じている。

(6) *The Seattle Union Record*, February 5, 1919, p. 8.

(7) *Ibid.*, February 6, 1919, p. 2.

総ストライキの物情騒然たる内に肅然として作戦計画に鳩議をこらし居る労働本部の形勢を見ればやと乗込んだ二人の日本人があつた一人は雀村街の安寧秩序を双肩に負ふ土屋総監一人は同情罷業の先鋒たる築野洋食店組合長であつた本部の幹部連は二人の姿を見るや駆け集つて握手を交換し殆ど胴揚げせん計りに会義堂に案内して誰れも彼れもよく日本人側は同情して呉れた難有いこの情義は労働同盟の存立するかぎり忘れぬと口を揃へて感謝を述べた二人は模様を聞き取つて帰らうとするとよく来て呉れた送り申さうと再び胴揚げをしてそれぞれ自動車に連れ込み宅までそれぞれ送り届けた⁽⁸⁾

しかも、いったんストライキに突入した日系人たちは、まもなくストライキの失敗が明かになり、白人同業者の中からは脱落者が始まった後も、組合の指令を守ってストライキの姿勢を崩さなかった。再びダイウォーク組合幹部の談話を引用しよう。

罷業中組合白人同業者中にはボツボツとブリーカーが出来ました際の如く藤本氏と私（近藤氏）はローカル組合の旨を受けてブリーカー白人同業者に説諭に出掛けました従来日本人が常にユニオン側よりブリーカー扱ひをせられて居つたのに今度は反対に日本人から白人ブリーカーを説諭するというふ珍妙な現象を呈したのは面白事で御座りましたブリーカーの処分は近々開かるべきローカル組合総会において決定する事になつて居ります罷業中警官の或るものは同業者に外国人にして市令に服従せず開店せざるものは送還すると脅かしましたが吾等は前述の決議理由に固執し罷業は違法行為でないといふ事を巡査に説明して帰したような次第でした其の後九日の日には電車は通過する新聞は出る罷業は失敗と見当はつきましたが吾れ吾れ同業者は他の組合営業者が開店するに關せずローカル組合から正規のコールオフの通知がある迄は決議案の責任を重じ様といふ事になりまして一昨日午後から開店した次第であります

このような行動が白人組合員たちの賞賛を得、日系人に対する彼らの評価をいよいよ高めることになったのはけだし当然であつた。ダイウォーク組合

(8) 『大北日報』1919年2月8日付5面。

の幹部は続いて次のように述べている。

及ばずながら吾れ吾れは終始一貫して個人的眼前利益を顧みず民族的意義に努力した考へで居りましたが自余同胞諸君の御協力相俟つて白人社会に多大の好感情を與へダイオーク、ローカル、ユニオンの代表者は拳つてセントラル、レイバー、カウンシルに於いて其の他有謂會議に於て日本人の行動を賞賛し日本人加盟許可当時日本人の行動に就き不安を抱いたものが多数あつたが事實は盡く杞憂に過ぎざりし事を証明しダイオーク組合の如き日本人加盟のために多大の便宜を得たと報告し職業的不信行為は白人側に却て多く日本人側に一のブリーカーを出さざりしは特に諸君の考慮を促す所であるユニオン發達の為めには日本的教育を組合員に施さねばならぬと極力賞揚して呉れ吾れ吾れは却つて聊さか閉口した形ちで御座いました⁽⁹⁾

V ストライキ委員会と日系人組合

もつとも、シアトル労働運動と日系人組合との連帯には、このようなストライキの熱狂の最中においてなお、一つの限界があった。このこともまたここで指摘しておく必要がある。

ストライキ直後に出版されたパンフレットの中でアンナ・ルイーゼ・ストロングは次のように述べている。

ストライキ以前に存在していた壁を乗り越える傾向はアメリカ人と協力してストライキに参加した日本人労働者についての討論の中でも現れた。日本人にゼネラル・ストライキ委員会の完全な代表権を与えようと望む人々と、彼らと協議するための委員会を送るに留めようと望む人々との長い議論の後で、彼らにゼネラル・ストライキ委員会への出席を求めるが、しかし投票権は与えないという決定が行われた。⁽¹⁰⁾

(9) 『大北日報』1919年2月13日付。

(10) Strong, *The Seattle General Strike*, p. 28.

すなわち、「日本人労働者の対応によって彼らとアメリカ人労働者の間に好感情が生じ」たにもかかわらず、日本人労働組合に白人労働組合とまったく同等の権利が与えられたわけではなかったのである。

ストロングは次のようにこのような決定の理由を説明している。

すでに述べたように、ストライキは最初から最後まで正規のAFL系諸組合の正当に選出された代表による固い統制の下におかれ、同様にストライキに参加したいかなる組織もその行為に対する発言権や投票権を与えられなかったのである。⁽¹¹⁾

この説明はそれ自体としては筋が通っているように思われる。しかしながら、すでに見たような日系人組合のストライキへの積極的対応に鑑みたと、我々はやはり、この決定によってシアトル労働運動は、ストライキ以前の彼らの日系人に対する差別と排斥の過ちを正す貴重な機会を逸したのではないかという疑問を禁じ得ない。ストライキ直後に書かれたこのパンフレットは、それから53年後の1972年に、新たな序文を付け加えてリプリントされた。その序文の筆者もまた、この点をこのストライキ、ないしこのパンフレットの重要な問題点の一つに挙げ、次のように指摘している。

同様に奇妙なのはここに現れた日系人労働者への態度である。日系人労働者もまたストライキに参加しゼネラル・ストライキ委員会へ代表を派遣するよう求められたが、投票権はなかった。どのような経緯でこの決定がなされたかは明かではないが、決定を下した人々の階級意識に深刻かつ破壊的なものとなったかも知れないような限界があったということ、このことは示しているのかも知れない。⁽¹²⁾

(11) *Ibid.*, p. 26.

(12) "Preface" for Anna Louise Strong, *The Seattle General Strike*, rep. ed (Bum Press ed.), Charlestown, Mass., 1972, no paginated.

Ⅵ ストライキの経過と意義

ゼネラル・ストライキ突入によって、シアトルの労働者はほとんどあらゆる勢力を敵にまわすことになった。かつては親労働者的であったシアトル・スター紙 *The Seattle Star* に率いられて、新聞、雑誌はゼネラル・ストライキをボルシェヴィキ的な革命の手段と非難し、急進派の勢力が追放されない限り、シアトル労働運動とのあらゆる妥協を拒否するようにシアトル市民に呼びかけた。実業界の態度については言うまでもないであろう。ストライキ前には調停に動いたシアトルの有力な市民たちも、ストライキ突入後は態度を著しく硬化させた。⁽¹³⁾ また市長のオーレ・ハンソンは、ストライキ2日目の2月7日の午後に、翌2月8日土曜日の午前8時までにはストライキを中止せよ、とストライキ委員会に通告するとともに、シアトル市民に対して次のような声明を發した。

市長たる私に与えられた権限によって、私はここにシアトル全市民に絶対的かつ完全な保護を与えることを保証する。彼らはまったく安全に彼らの毎日の仕事や業務に従事すべきなのである。我々には1500人の警察官、1500人のルイス基地の正規兵がいる。そしてもし必要とあれば、生命、事業、財産を守るために北東部の全兵士を動員できるし、また動員するつもりである。

シアトルの全市民が自分のアメリカニズムを示すべき時が来た。恐れることなく平常どおりの義務を遂行せよ。我々は、諸君が食料、交通機関、水、灯火、ガス、その他の必要なものを手に入れることができるよう手配するであろう。この地域を無政府主義者には支配させない。法を破るすべての者は敏速に処置されるであろう。

この宣言はシアトル・スター紙の第一面に掲載され、武装警官に守られた車によって市内にばらまかれた。⁽¹⁴⁾

(13) Friedheim, *op. cit.*, pp. 134-136.

東部のAFL系国際組合の本部からも、シアトルの労働者に対して強い圧力がかけられた。ゴンパースに率いられたAFL主流派の人々にとって、このゼネラル・ストライキはAFLの原則からの逸脱に他ならなかった。国際組合の多くは、電報、ないしは電話で、それぞれのシアトル支部にストライキに突入しないように指示を送った。一部の国際組合幹部は直接シアトルに赴いて説得に当たっていた。事前に説得が成功したのは印刷業組合だけであったが、ストライキ突入後はより多くの組合幹部がシアトルに乗り込んで、ストライキを中止するよう圧力をかけたのである。⁽¹⁵⁾

このような厳しい情勢の中でも、ゼネラル・ストライキは整然と行われた。一部に予想されたような混乱は発生しなかった。突入直前に最大の焦点となっていた市営発電所は、結局閉鎖されなかった。病院はストライキ中も何ら問題なく運営され、幼児のためのミルクも確保された。冷蔵食品の保存設備も機能していた。ストライキ参加者や家庭で食事をとれなかった人々のためには、当初18箇所、後には21箇所の臨時的給食所が設置された。市内の治安はむしろ平常の時以上に良好であった。その理由の一部は、非常事態に備えてタコマ郊外のルイス基地からシアトルに派遣された軍隊の存在であったかも知れない。しかしながら、シアトル労働運動の保守派を代表する人物の一人であるラスト Frank A. Rust を指導者として結成された、説得以外の武器を持たない約300人の労働者復員兵警備団 the Labor War Veterans Guard の活動も、混乱と暴力沙汰の発生を防ぐにあたって同様に大きな役割を演じたのである。⁽¹⁶⁾

しかしながら、政府にも経営者にも労働者の要求を入れようとする気配は

(14) *Ibid.*, pp. 131, 139. なお、『大北日報』1919年2月7日付5面、参照。

(15) Friedheim, *op. cit.*, pp. 139-140. cf. pp. 152-153, Strong, *The Seattle General Strike*, pp. 33, 35.

(16) Friedheim, *op. cit.*, pp. 125-129, Strong, *The Seattle General Strike*, pp. 38-43, 46-49.

見られなかった。そしてストライキに突入して三日めの土曜日の午前中には、早くも労働者の足並みに乱れが生じた。一部ではあったが市街電車が走り始めた。そして午後には、レストラン、理髪師、小売業、運輸関係の業種でも操業が再開されはじめた。

まもなく執行委員会は退却を決意した。すなわち、土曜日の深夜午後12時を以てストライキを中止するという提案を、ゼネラル・ストライキ委員会に対して行うことを、13対1で（1人は欠席）でもって決定したのである。

午後のゼネラル・ストライキ委員会では執行委員会の依頼によってダンカンがこの提案を行った。シアトル労働運動の有力な指導者のほとんどはこの提案に好意的であった。オルトも2時間の演説でダンカンを支援したという。しかしながら、翌日の午前4時12分まで続いたこのゼネラル・ストライキ委員会は、結局のところ圧倒的多数でこの提案を否決した。熱気はまだ失われていなかったのである。

しかしその日はすでに日曜日であった。冷静になるために十分な時間が委員たちに与えられた。月曜日のゼネラル・ストライキ委員会は、執行委員会の新提案を受け入れた。かくして、ストライキは2月11日火曜日の正午をもって中止されること、そしてすでに仕事に復帰した組合に対しては全組織労働者の統一行動のためにもう一度期限付きでストライキを再開するよう呼びかけることが、決定された。この呼びかけに答えた組合もあれば事実上無視した組合もあった。いずれにせよシアトルの労働者は、なおも闘いを続ける造船所労働者だけを残して、2月11日正午に最終的にゼネラル・ストライキを中止したのである。⁽¹⁷⁾ 言うまでもなく、日本人洋食店組合員、理髪業組合員、そしてダイウォーク組合員もまた、同日、白人労働組合と歩調を合わせて仕事に復帰した。⁽¹⁸⁾

(17) Friedheim, *op.cit.*, pp. 138, 140-145, Strong, *The Seattle General Strike*, pp. 33-38.

(18) 『大北日報』1919年2月10日付8面、および2月11日付参照。

それでは、結局のところこのストライキはシアトル労働者にとって何を意味したのであろうか。ゼネラル・ストライキ最後の日、2月11日の論説でユニオン・レコード紙は以下のように主張した。

シアトル・ゼネラル・ストライキの最大の成果はすでに達成された。そしてその成果とは労働者の共同行動に示された新しい精神であった。多くの組合のメンバーが労働界のために無報酬で日夜頑張った。日本人はアメリカ労働者と運命をともにした。世界産業労働者連盟は、彼らもトラブルを起すことなくゼネラル・ストライキに協力できるということをアメリカ労働総同盟に示そうではないかと宣言し、「トラブルを起す」かもしれないメンバーを厳しく統制しようと提案した。そしてその代わりに彼らの組合員証は、他の組合員証と同じように、給食所において受け入れられた。⁽¹⁹⁾

たしかに、このゼネラル・ストライキによってシアトルのAFL系諸組合の労働者間の連帯が再確認され、白人労働者と日系人労働者間の壁が破られた。しかもこの記事が物語っているように、ゼネラル・ストライキの中で乗り越えられたのは白人労働者と日系人労働者間の壁だけではなかった。

2月6日、AFL系組合の労働者とならんで、約3500人と言われるウォブリーズがストライキに参加した。彼らのストライキへの参加自体は、日系人労働者の場合と異なり、当然予想された事態であった。AFL系の指導者たちが恐れていたのはむしろ、彼らが過激な行動に走り、それが市民の反発を呼び、そしてその責任をストライキ委員会が負わされることであった。しかしながら実際には、ストライキへの参加にあたってシアトルのIWW本部はウォブリーズの無秩序な行動を固く戒め、統制に従わない者は、同志であるウォブリーズ自身の手によって市外に追放されるであろうと警告した。

そしてIWWはその言葉をその後の行動によって証明した。ゼネラル・ス

(19) *The Seattle Union Record*, February 11, 1919.

トライキの期間、ウォブリーズはAFL系の組合員同様に規律を守って行動した。

他方ゼネラル・ストライキ委員会も、臨時に設置された給食所においてウォブリーズをAFL系組合員と同様に扱うことによって、彼らの協力に報いたのである。

すなわち、ストライキによってほとんどすべてのレストランが閉鎖されたために、ゼネラル・ストライキ委員会は市内の各所に給食所を設置して、労働者や市民の便宜を図った。ところが、最初はAFL系諸組合の組合員とウォブリーズとの間に差別があった。すなわちAFL系組合の組合員証所持者が25セントで食事を支給されたのに対して、IWWの赤い組合員証の所持者は、一般市民の場合と同様に、35セントを請求されたのである。金曜日のゼネラル・ストライキ委員会でこのことが問題になり、議論の結果、委員会はIWWの組合員をAFL系組合員と同様に取り扱いすることを決定した。⁽²⁰⁾

それゆえ、もしもストライキの目的が労働者の連帯を誇示することそれ自体にあったのならば、ストライキは予想以上に大きな成果を収めたと言っても差し支えないかも知れない。

しかしながら、このゼネラル・ストライキは、本来、政府の強硬な態度によって苦しい闘いを強いられていた造船労働者に対する同情ストライキに他ならなかった。したがって彼らを鼓舞し、彼らのために政府や経営者から何らかの具体的な譲歩を引き出すことこそが、このストライキの最初の目的だったはずである。そしてその意味ではこのストライキは完全な失敗に終わったのである。

しかも、より重要なことであるが、ストライキの終結は単なるストライキ以前の状態への復帰ではなかった。なぜなら、実のところこのゼネラル・ス

(20) 以上、Strong, *The Seattle General Strike*, pp. 26-28, Friedheim, *op. cit.*, pp. 124, 130-131. なお最終日には誰に対しても25セントになった (Strong, *The Seattle General Strike*, p. 43).

トライキを契機に、シアトルは合衆国の他の地域に先駆けて、労働運動の冬の時代を迎えることになったのである。⁽²¹⁾

Ⅶ ストライキ直後のシアトル労働運動

ストライキ終結後ただちに政府の弾圧が始まった。レオン・グリーンやアンナ・ルーズ・ストロングに対する逮捕状が出された。もっとも、前者は逃亡し、後者に対する告発はまもなく取り下げられた。⁽²²⁾ また、IWWのホールや、IWW関係の出版物を印刷していた印刷所、さらにはアメリカ社会党の本部が搜索され、31人のウォブリーズを含む39人の関係者が逮捕された。彼らのほとんどは、ゼネラル・ストライキの指導にも、そしてもちろんシアトル中央労働評議会にも直接関連してはいなかった。しかしながら彼らの逮捕がゼネラル・ストライキを契機としていることは明白であった。⁽²³⁾

経営者たちは、ストライキ終結後まもなく結成されたシアトル産業連盟 The Associated Industries of Seattle を中心として、オープン・ショップ運

(21) シアトル中央労働評議会加盟組合の組合員数は1919年の65,000人から翌1920年には25,207人に落ち込んだ (O'Connell, *op. cit.*, p. 86)。他方、BLSの推計による合衆国全体のAFL系組合の組合員数は、1919年326万人、1920年408万人、1921年390万人、1922年320万人、1923年290万人 (U. S. Bureau of the Census, *Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1970*, White Plains, N. Y., 1989 (original ed., Washington, D. C., 1975) p. 177) であるから、シアトルにおける労働運動の衰退は全国における労働組合の衰退に先行している。なお、Dembo, *op. cit.*, p. 688 の数値はO'Connell の数値と大きく異なっているが、シアトル労働運動の衰退が全国に先駆けている点は同様である。

(22) Friedheim, *op. cit.*, pp. 149-151. その後のグリーンの方行は謎に包まれている。他方、アンナ・ルーズ・ストロングに対する告発が撤回されたのは、ワシントン州の民主党組織が、この処置によって労働者票を失うことを恐れて政府に抗議したためである、というのが彼女自身の解釈である (Strong, *I Change Worlds*, p. 84)。

(23) Strong, *The Seattle General Strike*, pp. 55-56, Friedheim, *op. cit.*, p. 151. なお、『大北日報』1919年2月14日付5面、参照。

動の火蓋を切った。労働運動のみならず、これに妥協的と見られた実業家までが彼らの攻撃の対象となり、ボイコット、融資や原料供給の拒否といった制裁を受けた。また、デパートや銀行はユニオン・レコード紙に対する広告の掲載をボイコットした。⁽²⁴⁾

ストライキに対する市民の評価はストライキの1か月後の市議会選挙で労働団体が支持していた3人の候補者が全員落選したという事実によって示された。

政治活動による失地回復に乗り出したシアトルのAFL系組合は、鉄道労働者の団体、およびワシントン州の農業団体グレンジと、三者連合 the Triple Alliance を結成して、12月の教育委員会、および港湾委員会委員の選挙に望んだ。この選挙もまた敗北に終わった。そこで彼らは、翌年の市長選挙に最後の切札としてダンカンを立候補させた。しかしながらダンカンもまた、50,873票対33,777票という、シアトル市長選挙としてはかつてない大差で敗れ去ったのである。⁽²⁵⁾

このような外からの圧力に加えて、内部の紛争がシアトルの労働運動を麻痺させた。ストライキ以降、保守派と急進派はいずれも極端な方向に進んでいった。かつてはその間にあって革新派が主導権を握っていたのであるが、この両極分解によって保守派と急進派との間で妥協点を見つけることがより困難になった。

AFL系組合とIWWとの対立も一層激しくなった。先にみたように、ゼネラル・ストライキにあたってはAFL系労働組合員とウォブリーズがともに闘った。そしてこのような関係は、ストライキの直後にも一応維持されていたように思われる。

(24) Friedheim, *op. cit.*, pp. 158-160, 164-165, O'Connell, *op. cit.*, pp. 132-133, Short, *op. cit.*, p. 23.

(25) Friedheim, *op. cit.*, pp. 165-169, Dembo, *op. cit.*, p. 279. もっともデムボによるとダンカンの敗北には彼の宗教やエスニシティが影響していたという。

すなわち、ストライキの直後、すでに述べたようにIWWの本部が捜索され多数のウォブリーズが逮捕された時、中央労働評議会はただちに特別の委員会を設置してこの事件の調査に当らせた。委員会は、分裂組織としてのIWWには反対であるが、この事件で彼らにかけられた嫌疑は不当なものであり、重要な基本的人権が侵されている、と報告した。中央労働評議会はほぼ満場一致でこの報告書を支持し、被告たちを擁護する決定を行ったのである。⁽²⁶⁾

しかしこのような協力関係はまもなく失われた。両者の関係は再び悪化し、しかもその対立はIWWが、シアトル産業連盟のクローズド・ショップ制度への攻撃に乗じて、すでにAFL系組合が支配的であった分野にも対抗組織を作り始めたために、いよいよ激化していったのである。⁽²⁷⁾

このようなシアトル労働運動の混乱の中にあっても、日系人組合のシアトル労働運動に対する態度は変わらなかった。たとえばダイワーク組合は、争議の後においても、争議中に得られた白人組合員との緊密な関係を続けようと努力を重ねていた。『大北日報』は次のように報じている。

大罷業に際して終始一貫の態度を持して白人ユニオン側の感謝を買ひたる同胞ダイワーク組合は当時協力奔走せるローカル、ユニオン幹部を昨夕まねきに招待して同胞側よりも同組合員五名出席し懇談会を催せるがローカル、ユニオンを代表して組合長トードヴァイン前組合長フィルモア幹事フィアース実行部委員ルイフ実行委員長デイロンの諸氏出席し初めての日本料理に舌鼓鳴らして賞味し歓談に時を移して十時頃散会せりと日白親善に絶へず努力する同組合幹部の労を多とすべきなり⁽²⁸⁾

さらにはまた、先に述べたダンカンが立候補した1920年のシアトル市長選の際も、少なくとも一部の日系人は、この機会にシアトル労働団体と日系人

(26) Strong, *The Seattle General Strike*, p. 56, Friedheim, *op. cit.*, p. 151,

(27) Friedheim, *op. cit.*, pp. 160-161.

との友好関係をより強力なものにしようと努めたように思われる。当時シアトル労働運動の内部にもぐり込んでいたある労働スパイは、雇主である実業家への報告の中で、ブラッドリーという活動家が自分に次のように語ったと記録している。

シアトルの黒人たちはダンカンを固く支持している。週刊サーチライトの代表が三者連合の全候補者のカットを取りに事務所にやってきて、そしてサーチライトの最新号に候補者の写真を載せたんだ。もう一つ面白いのは、日本人の代表たちが事務所へやってきて、選挙資金として125ドルくれて、彼らの支持を約束したことだ。我々はどちらのグループに対しても支持を訴えたりはしなかった。しかし彼らは、ダンカンならコールドウェルがやろうとしない公平な処遇を彼らに与えるだろう、ということを知っているんだ。これらのことを考えると、俺たちは選挙の後では俺たち自身の市長を持つことになるだろうと思うんだ。⁽²⁹⁾

(未完)

(28) 『大北日報』1919年2月28日付5面。他方、1921年1月25日のユニオン・レコード紙は、日本人理髪師組合がその創立15周年記念会に白人たちを招待し、やはり日本料理や日本舞踊でもって歓待したことを伝えている。なお、この会にはアンナ・ルイズ・ストロングも招待されており、ユニオン・レコード紙によると、彼女は次のように挨拶したという。「私をはじめで日本人理髪師組合のことを耳にしたのはゼネラル・ストライキの時でした。その時彼らはアメリカ人理髪師たちに彼らもまたストライキに入ると伝えてきたのです。私は当地で起ったいかなる事件もこれほど二つの人種の組合の間の友好的な感情を強化したことはなかったと思います。アメリカ人理髪師と日本人理髪師の間の相違のほとんどは我々の不正な経済システムに由来しています。我々はともに正しい分配のシステムのために努力しなければなりません。そうすればはや我々の間の相違はなくなるでしょう。」(*The Seattle Union Record*, January 25, 1921, p. 2.)

(29) Beck Broussais C. Papers (Manuscript Collection of The University of Washington, Accession No. 155), Report of Agent 106, March 1, 1920.